

論文審査要旨および担当者

報告番号 甲乙 第 号 氏名 徳永聡子

論文審査担当者

主査	慶應義塾大学文学部教授 文学研究科委員	高宮利行
副査	慶應義塾大学文学部教授 文学研究科委員 DPhil	松田隆美
副査	Glamorgan 大学英文学部教授 PhD	A.S.G.エドワーズ

論文題目

‘The Textual Transmission of the *Canterbury Tales*: the Case of Wynkyn de Worde’

(『カンタベリー物語』の本文伝播 ウィンキン・ド・ウォードの場合)

論文執筆者の徳永聡子君は、慶應義塾大学文学部英米文学専攻を卒業後、文学研究科後期博士課程を平成 15 年に単位取得退学した。その間塾派遣留学生としてパーミンガム大学で修士号を取得、提出した修士論文はその年の最良のものとしてジェフリー・シェパード賞を受賞した。現在は日本学術振興会特別研究員として研究の傍ら、本塾文学部で英語の非常勤講師を務め、また DMC の RA も務めている。

本論文は次の問題意識に裏付けられている。中世後期の英国で人気を博した英詩『カンタベリー物語』の、現存する写本は 80 点を越え、また 15 世紀末までに少なくとも 4 度上梓された。特に英国に活版印刷術をもたらしたウィリアム・キャクストンが刊行した 2 版（1476 年ごろ；1483 年ごろ）は、書物としての歴史的価値のみならず、本文校訂、書物史、書誌学、文学史のさまざまな視点から研究が行われてきた。しかし、彼に続く印刷業者たちが刊行した版については、断片的な研究があるにすぎず、本文の受容という視点からの研究はあまり進展していない。特に、ひとつの作品が印刷本から印刷本へと受け継がれる場合、初期印刷業者たちは新たに写本の読みを取り入れることはほとんどなく、そのまま前の版を再版したにすぎないと考えられてきた。こうした見解は、初期印刷本の時代には厳密な意味での「本文校訂」という概念が印刷業者たちのあいだに芽生えていなかったという前提に起因する。本論文では、キャクストンの後継者ウィンキン・ド・ウォードによる 1498 年版に焦点を当て、詳

細な本文校合に基づいて、15世紀末の英国において、ド・ウォードがこの作品をどのような意図をもって出版したのか一考を加えようとする。

論文の構成

英語で書かれた本論文は、序論と結論を含めて、全6章で構成されている。

Introduction

Chapter 1: Early Printers and the *Canterbury Tales*

Chapter 2: Methodology for the Textual Analysis

Chapter 3: De Worde's Copy Text: Cx2 or Manuscript?

Chapter 4: De Worde's Manuscript and olim Phillipps 6570

Conclusion: De Worde and the Reframing of the Narrative

Appendix

Bibliography

論文の要旨

『カンタベリー物語』の本文研究は、20世紀初め以降隆盛をきわめ、多数の校訂版が出版されてきた。この作品は、他の多くの中世文学作品と同じく、詩人による著者原稿は現存しない。このため本文研究では、「著者の意図」を復元することを主眼とする研究が、20世紀半ばまで続いた。特にこの作品は、1400年のチョーサーの死後、百年間に制作された現存写本が80以上にものぼるため、その本文伝播の問題は極めて複雑であるが、現存写本すべての本文校合に基づいたマンリーとリカート版(1940)や、近年ではコンピューター技術を駆使した『カンタベリー物語』プロジェクトによるCD-ROM版など、さまざまな校訂版が出版されている。

従来、著者原稿ないしは底本の再構築を目的とする研究では、対象とする資料はきわめて限定されていた。特に、本文が写字生によって変更された写本や、著者の没後一世紀近くも経て出版された『カンタベリー物語』のような印刷本は、著者原稿の復元に寄与しないとして、長く光が当てられることはなかった。

しかし20世紀後半になると、本文研究、書誌学の分野から、著者原稿の再構築に努めるだけでなく、本文の受容も注目すべしとする方法論が提唱され、書物と歴史・社会的背景との連動性、さらには書物の構造とテキストの表象との関連性を考察する認識の必要性が求められている。こうした方法論は、中世英文学研究の動向にも大きな影響を及ぼし、作品を転写する写字生をも視野に入れた写本研究が急速に発展した。同様に、キャクストンのみが研究の中心であった初期印刷本研究においても、本論文で扱うド・ウォード研究も進展し、15世紀末から16世紀初頭にかけてド・ウォードが英国の出版界で果たした役割に

ついても理解が深まりつつある。

しかし、ひとつの中世英文学作品が印刷本へと受け継がれる過程で、テキストがどのように変容したのかに関する具体的な研究はあまり多くない。特に、『カンタベリー物語』の場合、ド・ウォードは印刷用原稿として用いたキャクストン第2版をそのまま再版したに過ぎないと考えられてきた。近年の研究でようやく、ド・ウォードが物語の一部に写本を用いたことが示されたが、その理由は印刷用原稿に欠葉があったという、むしろ消極的な理由による見解がまだ一般的である。こうした見解は、『カンタベリー物語』の本文研究者たちの研究成果に基づくもので、ド・ウォード版を一冊の書物として捉える視点は欠如している。すなわち、テキスト伝達者としてのド・ウォードまで視野を広げた研究は、まだ充分熟しているとは言えず、中世英文学作品の本文研究とド・ウォード研究の連動の必要性が求められている。

このような問題意識を起点として、著者は『カンタベリー物語』の詳細な本文校合を本論で徹底して行い、その分析結果から、ド・ウォードが目指した書物作りについて結論部で論じた。

序論においては、上記に述べたド・ウォード版『カンタベリー物語』のテキストを分析する意義を、チャーサー作品の本文研究の流れと、近年の書物史的研究の動向から確認した。

ド・ウォード版は1498年に出版されたが、これ以前には、キャクストンが2版、またド・ウォードと同時代に活躍したりチャード・ピンソンも1492年に出版している。第1章では、これら初期印刷本『カンタベリー物語』全般の概略と先行研究を、テキスト面からまとめている。

ド・ウォードは印刷用原稿として、キャクストン第2版だけでなく、写本も一部用いていることが、近年の研究で明らかとなりつつある。しかし、その写本の系統の見解は、研究者間のなかで一致をみしていない。そこで第1章の後半では、ド・ウォード版についてなされたテキスト研究を概観することで、いずれも断片的な調査で終わっていることを指摘し、ド・ウォード版のテキスト全体を徹底的に検討し、その底本を明らかにする必要性を示した。また、ド・ウォードが印刷用原稿として用いたキャクストン第2版は、その初版に写本からの書き込みを加えて印刷したものである。その写本は現存しないものの、『カンタベリー物語』の写本の系統において重要な読みを多く含むものであることが最近の研究で明らかとなった。初期印刷本研究者によっては、ド・ウォードは、キャクストンが第2版の印刷の際に用いた写本を使ったのではないかという見解も示している。第1章ではこの点にも触れ、本論文最終章で筆者の見解を論じている。

第2章では、第3章と第4章で行うテキスト分析の方法論が論じられる。『カンタベリー物語』は複数の巡礼者が語る物語から構成されるが、本研究の第一の主眼はド・ウォードが各巡礼の物語で、キャクストン第2版もしくは写本のどちらを用いたかを確立するところにある。このため、著者はテキスト分析の方法論として、ド・ウォード版とキャクストン第2版を徹底的に校合し、その読みの違いを写本の読みと照らし合わせる作業を積み重ねている。この過程においては、何を異なる読み (variant) と定義するのか、また写本の系統をも考える必要があること、また印刷本の場合、印刷業者や植字工の手によってテキストに変更が加えられることがあることも留意する必要性を指摘する。

『カンタベリー物語』の写本の系統は、マンリーとリカート版 (1940) によって整理され、本研究もその写本の分類に依拠するところが大きい。さらに近年では『カンタベリー物語』プロジェクトがコンピューター技術を駆使して、あらたにテキスト派生の解明に取り組み、マンリーとリカートが提示した写本の系統図に新解釈を加えている。『カンタベリー物語』プロジェクトは独自のテキスト校合ソフトを開発し、数百ものテキストを同時にテキスト校合することを可能とした。本研究ではこのプロジェクトの協力を得て、コンピューター上でのテキスト校合をド・ウォード版と現存する写本ならびに初期刊本によって行った。しかしこうしたデジタル校合は、転写したテキストの正確さで校合結果が左右する問題も孕んでいる。また、80以上もの写本の読みをすべて整理することはきわめて多大な時間と労力を要する。本研究では『カンタベリー物語』の写本系統の分析そのものに主眼があるのではないため、ド・ウォード版との読みの一致の確認には、マンリーとリカート版も同時に活用している。マンリーとリカート版にもほぼすべての写本の読みの異同が記録されているからである。しかし、マンリーとリカート版の不正確さや、彼らが提示した写本の系統にも問題点は指摘されており、こうした点で本研究での課題点があることは否定できない。

第2章で論じた方法論、問題意識を踏まえた上で、第3章ではド・ウォード版とキャクストン第2版の読みの違いをド・ウォード版の物語の配列に沿ってつづさに検討し、ド・ウォードがどの巡礼の物語でキャクストン第2版を底本としているのか、またいずれの物語で写本を用いたのかが明らかにされた。

従来の研究では、ド・ウォードが用いた写本はキャクストンが第2版で使用したのと同じであると推察されてきた。しかしながら、本論文の最終章で、まずド・ウォードが使った写本がキャクストンのものとは異なることを確認した。すなわち、ド・ウォードは何らかの経路でキャクストンが第2版のために用いた写本とは別のものを手に入れたことになる。ド・ウォードが『カンタベリー物語』を出版した時期の顧客やパトロンを鑑みると、貴族や聖職者、商人

などさまざまな人物のネットワークを築いている。特にロジャー・ソーニー（Roger Thorney）という商人が所有した写本の数点は、ド・ウォードの他作品の印刷用原稿として使われた事実があり、両者の密接な関係が明らかとなっている。すなわちド・ウォードは、彼のパトロンの存在である顧客から写本を借りて、キャクストン第2版を改訂したと考えられるのである。

ド・ウォードがキャクストン第2版を再版する際、わざわざ写本を用いて一部の物語のみに変更を加えた理由について、従来は、ド・ウォードが依拠したキャクストン第2版に欠葉箇所があり、そのテキストを補足するためであると考えられてきた。しかしながら、最終章第2セクションで「修道僧のはなし」のテキストとレイアウトを詳細に検討し、ド・ウォードが完本のキャクストン第2版と写本の両方を持ち合わせていたこと、そして彼が両者の内容を比較検討した結果、写本の物語の構造を取り入れたことを明らかにした。

キャクストンとド・ウォード両者の写本の使用法を比較してみると、キャクストンは『カンタベリー物語』全体の前半の物語のみに写本を用い、散文の物語にはほとんど改訂を加えていない。これに対してド・ウォードは、巡礼たちの語りの順番をキャクストン版とは異なる配列に変えているにも関わらず、前半の物語はほぼキャクストン第2版に忠実である。しかしながら興味深いことに、キャクストンが手を加えなかった後半の物語では、写本を底本としているのである。

『カンタベリー物語』は中世で人気を博したさまざまなジャンルの寄せ集め作品であり、いわゆるコンピラーティオ（*compilatio*）やオルディナーティオ（*ordinatio*）といった特性が、写本のレイアウトにも反映されていることが多い。こうした作品に内在する特質に注目すると、巡礼たちが語る物語のなかでも、ド・ウォードが「サー・トパスのはなし」と2つの散文物語「メリベウスのはなし」、「司祭のはなし」を印刷する際、写本を積極的に用いている点は注目に値する。なぜならこれらの物語のソースであるロマンスや道徳・宗教的手引きの類は、まさにド・ウォードが『カンタベリー物語』出版と同時期に手がけていた出版物の種類と合致するからである。特にド・ウォード版「メリベウスのはなし」と「司祭のはなし」には、印刷本ではじめて欄外注解が加わり、これらの物語の理解を容易にしている。さらに「司祭のはなし」においては、本文の意味を強調すべく、ド・ウォード自身が語句を付け加えたり、同時代の読者に分かりやすいように言い換えた変更も多く、物語それ自体をいわば宗教的手引書へと変容させているとも言えよう。またこれらのジャンルの物語は同時期の出版業界において、大いに人気を博しており、ド・ウォードが『カンタベリー物語』を出版した際、そうした同時代の読者の嗜好を意識し、物語をあらたな形で提示すべく写本を用いたとも考えられる可能性が示唆される。

以上のように、本論文では『カンタベリー物語』の本文研究を基盤とし、最終章でド・ウォードの出版活動をも視座に入れ、ド・ウォード版『カンタベリー物語』の編集方針に一解釈が加えられた。ド・ウォードが写本を用いたのは、印刷用原稿の欠葉を埋めるといった、消極的な理由からではなく、この作品の性格を理解した上で、その構造をあらたに組み直すために用いたのであり、きわめて前向きな理由からである。また、本文研究の分野では、キャクストンが出版した作品のみが写本と同様の価値があると見なされてきたが、ド・ウォードが用いたいまや失われた写本とそれに近いフィリップス旧蔵写本 6570 番も、『カンタベリー物語』の本文研究の上で重要だと結論付けられている。

審査要旨

本論文のコピーが 2005 年 4 月に副査エドワーズ教授に送付され、8 月 3 日ロンドンで主査の高宮はエドワーズ教授と 1 時間に亘って討議を行った。エドワーズ教授から 8 月 20 日付けで郵送された評価と、松田教授から提出された評価を元に、9 月 15 日高宮・松田が徳永君と 2 時間に亘って本論文の内容に関する口頭試問を行った。

徳永論文はド・ウォードの『カンタベリー物語』の印刷本がキャクストン印刷の第 2 版とともに、特定の写本を底本として用いているという従来の指摘に関して、具体的にどの箇所で写本を用いているのか、写本とキャクストン第 2 版は平行して用いられたのか、使用された写本は現存する『カンタベリー物語』写本の中でどのグループに一番近いかを、書誌学的な比較校合の方法論を通して明らかにし、テキサス大学図書館所蔵のフィリップス旧蔵写本との近似性を主張する結果を提示している。膨大な出版点数で存在する現代のチョーサー写本学の最先端の研究動向を渉猟したのみならず、現地での調査結果に基づいて提出した推論は、高い妥当性と独創性を示している。徳永君はエドワーズ教授からのコメントに対しても、足りない部分を適切に説明した。

しかしながら、本論文を近い将来に出版する可能性を考慮した場合、序論でド・ウォードの人物像、英語力、協力者の介入度などについて論及すべきであること、章によっては論理展開に無理があること、結論が長すぎて 2 章に分けるべきであること、すぐれてこなれた英語表現にミスプリントが散見されること、などが示唆された。しかし、これらは十分に修復可能な瑕疵とみなされるべきであろう。

この口頭試問の結果、審査員一同は徳永君が本論文の提出をもって、課程博士（文学）を授与されるにふさわしい中世英文学徒であると判断し、文学研究科委員会に推薦する次第である。

(文責 高宮利行)